
深紅の牙

晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

深紅の牙

【Nコード】

N9917W

【作者名】

晶

【あらすじ】

晋助が、松陽先生に出会う以前のお話。

ギャグなし。

出会い

——この世界は腐ってる。

「アイツ、またサボりだつてよ」

夕暮れ時、寺小屋からは勉学を終えた子どもたちがぺちやくちやと話しながら姿を現す。

一際大きな声で話すのは、いかにも悪ガキ、という風貌の三人の子どもたちだ。

どうやら誰かの陰口を言っているらしい。

リーダー格らしい太った少年が口火を切ると、他の二人も話しはじめた。

「マジかよ。なんでアイツだけ特別扱いなんだ？」

「一人じゃ何にもできねえくせにな」

三人組がけらけらと笑いながら家々の角を曲がる。

と、突然、太った少年が宙に浮いた。

「誰が…何にもできねえって？」

曲がり角の先にいたのは、華奢な、小柄な少年。

だが少年は、太った少年の杢元を引っ掴み余裕の表情でこれを持ち上げる。

「た…っ!!」

「言ってみろよ」

華奢な少年は薄く笑いながら、太った少年を掴む力を強くする。

「い、痛え!! やめ…っ!!」

「何をしている!!」

足をバタバタとさせて騒ぐ太った少年の声で、異変に気付いた教師が駆け付けたらしい。

「せ、先生…!!」

「高杉君が…高杉君がっ!!」

先程まで虚勢を張って話していた悪ガキたちが、急に情けない声で教師に駆け寄る。

教師は駆け寄る子どもたちを一瞥し、騒動の発端の少年に目を向けた。

「き、君は…高杉晋助君!」

少年を見て教師は少し目を泳がせると、あろうことか駆け寄つてきた三人組を睨みつけた。

「どうせ、お前たちが余計な事をしたんだらう？」

「先に手えだしたのは俺ですよ」

三人組が答える前に、晋助が言う。

だが、教師は晋助を責めない。

それどころか晋助に笑顔を向け、逆に三人組には冷たく、さつさと帰りなさい、と言い放った。

教師は、不満そうにその場を離れる悪ガキたちを突き放すような目で見送り、にっこり笑って晋助に語りかけた。

「あんな連中の言うことは気にしちゃ駄目だよ。ところで明日こそは寺小屋に顔をだしてくれるのかな？」

張り付いたような笑顔、とはこういうものと言うのだろうか。

晋助は教師から目を逸らしわざと聞こえるようにため息をついた。

「行く気が失せました」

教師の顔が明らかに引き攣る。が、この教師はすぐに先程よりもいっそう嘘くさい笑顔を作る。

「：そ、そうか！君は家でもっといい先生に教わっているもんな。だだちよつとは遊びにくるような感覚でこっちにも来てくれないかな？」

「…そうですね」

どうせこの教師は何を言ったって堪えない。
面倒になって、晋助は適当に相槌をうった。

「そうかそうか！じゃあ、待ってるよ。あ、お父さんによろしく」

そう言って満足そうに去っていく教師の背中を見送り、晋助はうんざりしたように顔をしかめた。

晋助の父は、このあたりでは有数の富豪だった。

身分制度の色濃く残るこの時代で高杉家の者たちは町の皆の羨望の的であり、その元にはおこぼれに預かろうと下級の身分の者たちがわらわらと集まった。

周りの大人はまだ年端もいかない晋助にさえ媚びへつらう。

そのため、晋助は同年代の子どもたちから妬みの対象になることも少なくはなかった。

欲に塗れた汚い大人たちも…陰でこそこそと人を羨むだけの馬鹿共も…。

——くだらねエ…。

屋敷に戻り、自分の部屋へと向かう。

「いてっ」

「？」

目の前で、何かが転んだ。

自分の前方で盛大に転んだそいつは、服装や持ち物から見て高杉家の使用人だろう。

歳は自分より少し上くらいだろうか。

金髪碧眼：変わった風貌の少年だ。

それが晋助とこの少年、優心との出会いだった。

出会い（後書き）

高杉さんはボンボンらしいのでそんな感じで…。

タイトルは私の一作目、『銀色の鬼』にあわせて色を入れてみたかっただけで特に意味はありません；^|^

多分数話で終わります。

優しい心

「お前、また寺小屋をさぼったらしいな」

顔を見たくないからわざわざ食事の時間をずらしたのに……。自分の息子にさえ見下した態度を取る父親にうんざりして、晋助は大きなため息をついて食事途中で食卓を離れる。

「待ちなさい！」

背後で怒った声が聞こえるが、晋助は振り返らずに部屋を出た。

「可愛くない子」

部屋を出るか出ないかの時、継母の呟きが聞こえた気がした。

退屈しのぎに書庫へ向かう。あそこは静かでいい。それに父親も、埃っぽい、なんて言ってあまり近付かない。

書庫の入口に差し掛かったところで、静かなはずの室内から女の怒鳴り声が聞こえた。

中を覗くと、散乱する本にまみれて先日目の前ですっ転んだ使用人の少年がうずくまり、叱られていた。

そういえばあいつ、俺の顔を見るなりビビって逃げ出したんだっけ。

ぼんやりとそんなことを考えていると、少年を叱っていた同じく使用人の、ごつい女がこちらに気付いた。

「あ、晋助様！すみませんねえ。すぐ片付けさせますから。ほら、さっさとやるんだよ！」

「は、はい！」

別にいいのだけど。

晋助が興味なさげに目当ての本を探しに向かうと、ごつい女は、お邪魔になるんじゃないよ、と少年に念を押してから、何やら別の仕事があるとかで部屋を出ていった。

本を見つけて戻って来ると、先程の場所にはまだあの少年がいた。

「…お前、仕事遅えな」

「は、はは。すみません」

少年はばつが悪そうに笑うと、片付ける手を少し早める。相変わらず、目は合わせてこない。

「それ、お前がやったんじゃないだろ」

持ってきた本に目を落としながら、晋助が言う。

少年はびくんと肩を震わせて、怯えたように、はい、と答えた。

「やり返せばいいのに」

晋助が呟くと、少年はちらりと晋助を見て、またすぐに自分の手元に視線を落とした。

「あ、僕、弱いし…。それに、暴力は苦手だな」

晋助はよく分からないと言う様子で、ふうん、と呟くと、少年に問いかけた。

「お前、名前は」

「え？あ…ゆうしんといいます」

耳に飛び込んできた変わった名前に、晋助は聞き間違いかと眉をひそめる。

が、少年の変わった風貌からもしや、と思ったことを尋ねてみる。

「ユーシン？変わった名前だな。異国の名か？」

「あ、はい。いや、違うくて…」

「どっちだよ」

あまりに挙動不審な少年を見て晋助が思わず笑うと、少年は少し安心したのかぼつりぼつりと話し出した。

「その…僕の母は異国の者で…あ、もう亡くなってるんですけど…。でも、名前はこの国に倣^{なら}いたって…漢字で、優しい心と書きます」

「優しい心、ね…」

優しいというか、情けないというか…。
晋助は目の前の少年をぼんやり眺める。

と、少年、優心がまた小さく呟く。

「お優しいのは旦那様、ですけどね」

「あのオヤジが？」

自分の利益の事しか考えていないような、あの父が？
晋助はまた、眉を寄せる。

そんな晋助の様子を知ってか知らずか、優心は笑顔で続けた。

「旦那様は身寄りを失った僕を優しく迎え入れてくださいました。
こんな、人と違う僕を」

「ふうん…」

晋助が曖昧に返事をしたところで、別の仕事とやらを終えたごつい
女が怒号と共に現れた。

「コラ！晋助様に気安く話しかけるんじゃないよ！終わったんだっ
たら厨房手伝いな！」

「す、すみません！」

怒られて萎縮したのかまた挙動不審になって、優心はそそくさと部屋から出ていった。

「すみませんねえ。晋助様。目障りだったでしょう？」

この女もそうだ。

にこにここと、偽物の笑顔。

「べつに…」

目障りなのは、てめえらの表情かおなんだよ。

晋助は、女から目を離すと、部屋をあとにした。

期待は淡く

旦那様は優しい、か。

父に優しくされた事なんてなかった。
というか、関わりさえあまりなかった。

たまに言ってくる小言は、自分の体裁を気にしてのものでしかない。
父が自分の利益のために汚いやり方で仕事を掴んでくるのも、汚い
奴らとつるんでいるのも知っている。

でも、優心のあの父を信じきったような笑顔を見て何となく、期待
を持ち始めていた。

父も本当は人の心を持っているんじゃないか、と。

でも、それは違った。

「それでね、アタシ晋助様に言ったのよ。あんまりあれに近づいて
はいけませんよって！」

あの時のごつい女の声が聞こえる。
相変わらず声までごついなあ、なんて思いつつ通り過ぎようとした

が、自分の名前が出てきたことで足を止めた。

そっと耳を、目を向けると、ごつい女を含めた数人の使用人が仕事をサボって話し込んでいるのが分かった。

「そうよね。旦那様のご好意で雇われたらしいけど…目の色も髪の色も…怪しげで同じ人間じゃあないみたい」

優心の話だと、すぐに分かった。

使用人たちは物陰にいる晋助の存在に気付かず、ぺちゃくちゃと話し続ける。

「いや、旦那様も引き取るしかなかったのよ。あれの父親は旦那様おとうとぎみの弟君らしいから！」

「あ、近頃亡くなられた？」

「そう！何でも夫婦共に亡くなられたとか。で、仕方なく身寄りがなくなったあれを引き取ったのよ」

そういえば父の弟―晋助にとっては伯父だが―が、先日亡くなったらしいことは聞いた。

その伯父の子、だったらなぜ…。

晋助の疑問を代弁するように、使用人の一人がごつい女に問う。

「でもじゃあ言うなればあれは高杉家の親族にあたるんじゃない？どうして使用人なの？」

「旦那様と弟君の間には以前壮絶な跡目争いがあったからよ」

ごつい女は、何だか偉そうに語り始めた。

「先代はご長男の旦那様より弟君の方を気に入られて跡目にしようとしたそうよ。遺言にまで残していたらしいけど：旦那様は先代が亡くなるとすぐに四方に手を回してなかったことにしたとか」

使用人の女たちが、まあ恐ろしい、とか、流石は旦那様、とか口々に感想を述べると、ごつい女はさらに偉そうに話を続ける。

「邪魔な弟君は適当な仕事を言い渡されて長崎へ派遣されたみたい。そこで異国の女と子を作ったのよ。弟君は長崎で力をつけつつあったし：生まれたのは男子でしょ？弟君亡き後の反抗勢力になっちゃいけないって事で一人息子を力無い使用人に据えたのよ」

それが、優心…。

晋助は、やっぱりな、と小さく呟く。

「それで弟君の財産と権威まで取り込んじゃうんだから恐ろしいわよね」

「可哀相な子ではあるけど、旦那様の手前あんまり親しくはできないわ」

「何言ってるのよ。誰も何も言わないのをいいことにあれに仕事押し付けてるのはどいつよ」

「あなただって自分のミスを押し付けてるじゃない！」

女たちは皮肉を言い合い笑うと、さすがに仕事をする気になったのかそれぞれの持ち場へ戻っていった。

ヒトは汚い。

自分と違うもの、自分より弱いものは平気で傷付け、蔑む。

それにやはり、父は優しくなんてなかった。

少しでも期待を持った自分が馬鹿らしく滑稽だ。

アイツは結局自分の保身のために動いただけ。

あいつは、そういう奴だったんだ。

俺は、優^{あいつ}心は、何を期待していたんだろう。

期待は淡く（後書き）

銀魂の世界に西洋の概念ってあるのかなあ……。分かりませんが、とりあえず。

近づく影

夕暮れ時。

子どもたちのつくる黒い影がくるくると踊る。

太った影とそれに付き従う痩せた影に小さな影、そしてしゃがみ込むもうひとつ。

賑やかに動いているが、どうやら仲良く遊んでいる、という風ではないらしい。

「やゝい、天人！ツノとか牙とか出してみろよ！」

「な、ないよそんなの」

「嘘つけ！変な髪だし、目も変だ！天人め！」

「ち、違…っ！」

河原で本でも読もうか、なんて思いながらなんとなくそこらを散歩していた晋助は、前方で馬鹿騒ぎする悪ガキ三人組の中心にしゃがみ込む珍しい黄金色を見つけ立ち止まる。

「何やってんの」

「あ、晋、助さ…」

こちらに気付き顔を上げた金髪は蹴られたり棒で突かれたりして薄汚れている。

「げっ！高杉だ！」

「行こうぜっ」

またくだらないことをしているのか…。

そう思い、晋助が三人組を薄く睨むと、先日痛め付けられた件がよほどトラウマになっているのか、悪ガキたちは一目散に駆けていった。

「またあいつらか。馬鹿じゃねーの」

「あ、ありがとうございます」

悔しい顔ひとつせず、にこりと笑って礼を言う優心に晋助はひとつ、大きくため息をつく。

「知ってたか？俺たちって従兄弟なんだぜ」

「あ、はい」

「何でこんなに扱い違うんだ、とか思わねえの？」

分かっていないのか惚けているのかは知らないが、優心は蒼い目をくりくりさせて困ったようにこちらを見る。

晋助は、まあいいや、とまたひとつため息をついて、恐れ多いと遠慮するボロボロの着物の優心に、自分の羽織りを乱暴にかけた。

晋助はしゃがみ込む優心の横にどっかりと腰をおろして当初の目的、読書にふける。

優心が不思議そうにその横顔を眺めていると、突然、晋助が口を開いた。

「なあ、お前の母親の国ってどれ？」

言いながら晋助は優心に手にした本を向ける。

本は異国を紹介するようなものらしく、開かれたページに記されていたのは世界地図の挿絵だった。

「え？あ、ああ…これ、です」

戸惑いながらも、ずっと差された指の先。

晋助はそこに書かれた文字を読み上げる。

「和蘭陀おらんだか」

和蘭陀…。確か、外界との関わりを断っていた江戸が、唯一国交を許した国のひとつだ。

晋助が書面で得たにわか仕込みの知識を巡らせていると、優心が言葉繋げた。

「母は貿易船の給仕をしてたそうです」

「ふーん。やっぱり目え青いの？」

「はい。髪の色も、僕より明るい金髪でした」

「へー」

しばしの沈黙…。

優心は、ふっと息を吐き、ちよつと自嘲ぎみに笑った。

「…やっぱり気味が悪い、ですよね？」

晋助は、ちよつと怪訝そうに優心を見た後、すぐに視線を本に戻し言う。

「別に？俺から見りゃあの不細工三人組の方が気味悪いけど。特にデブ。どうやったらガキがあんなに太るんだ」

優心は驚いたように目をぱちくりとさせて、言い過ぎだよ、なんて言いながらもくすくすと笑った。

―・―・―・

川辺のふたりを、眺める影がふたつ。

髪との境目が分らない程髭を蓄えた男と、それとは対照的に髪から眉に至るまで顔中の毛という毛を剃り落としたような筋肉の塊の男たち…。

「どっちが高杉家の坊ちゃんだ？」

髭の男が、不衛生窮まりないその髭を掻きむしりながら面倒そうに髪のない男に問いかける。

「さあ。目立つ奴とは言ってたけどな」

同じく面倒そうに返ってきた応えに、髭の男が目を細める。

「目立つつつたらお前エ…あの金髪か？いい羽織りも着てるし」

髪のない男も目を細めて子どもたちを見定める…が、やがて考えるのを放棄して言った。

「面倒臭え。どっちもさらってけばいいだろ」

身代わり

「何だてめえら」

近付いてくる妙な気配に気付き、晋助は眉を寄せた。
目の前にいたのは、髭面の男と禿げた男。

明らかなる不審者を目一杯睨みつけるが男たちは余裕そうに嫌らしく笑った。

「誘拐犯でゝす。ヨロシクね」

「高杉晋助君って、どっち？」

男たちの腹立たしい態度に苛立ちを感じながら晋助が、俺だ、と名乗り出ようとした、その時だった。

「高杉晋助は、お、俺だ。何の用だ？」

一歩、踏み出したのは優心だった。

「何言っ…」

どん、と晋助の体が弾かれる。優心だ。

彼は、名乗り出ようとする晋助を突き飛ばした。

「てめっ！」

咄嗟のことに多少たじろぎながらも、晋助は身を起こし、もう一度自分が高杉晋助だ、と訂正しようとした…が。

「貴様ら、何をしている！」

「げっ！奉行所の連中だ！」

子どもたちに絡む怪しげな男たちに声を張り上げたのは、ちょうど巡回中だったふたりの役人だ。

面倒事は避けたいらしい男たちは急に焦りだし、手近な優心を引つつかむ。

「とりあえずこいつだけでも連れてくぞ！」

「ま、待て！」

止めようと急いで立ち上がるも、男たちは優心を抱えてみるみるうちに見えなくなってしまうた。

「君は！晋助君じゃないか！怪我を…っ！」

駆け寄ってきた役人が子どもの正体を認めると急に目の色を変えた。役人は突き飛ばされた時少し擦りむいたらしい晋助の膝を見て大袈裟に驚いて見せる。

「んなことより、アイツが…っ！」

「待ちなさい！ 奴らは私が追うから。君は帰るんだ」

「…嫌だね」

晋助は役人を振り切って男たちを追おうとするもそこは大人と子ども。

簡単に押さえ付けられてしまった。

「おい、彼を家までお送りしろ！」

「分かりましたっ！」

ふたりの役人のうちのひとりが、御免、と言、晋助を抱え込むようにして運ぶ。

「くそっ！ 離せっ！ 俺は…っ！」

晋助の抵抗も虚しく、河原には声だけが響いた。

期待通り

カチャリ、と自室の鍵が開く音がして扉に目をやる。

「少しは頭も冷えたか」

「……………」

現れたのは涼しい顔をした父親。

もう何時間、自室に閉じ込められていた晋助は、この父を無言で睨みつける。

「馬鹿な誘拐犯で良かったな晋助。あんな餓鬼とお前を間違うとは」

馬鹿にしたような言い草に腹は立つが、外界と遮断されたこの空間で外の動きを知るのはこの男のみ。

晋助は仕方なく、尋ねた。

「…捜査は進んでるのか？」

「知らんな」

答えは実に淡泊で、適当なものだった。
興味すらない、そんな印象。

「一応てめえの甥だろ」

「ふん。甥で、童だから情けをかけてこの家に入れてやったのさ。ようやく厄介払いができたというものよ」

情もなくただ冷笑する父の影に、この男のことを優しいと言った笑顔がちらついて、晋助は怒りを噛み殺しながらも冷静に努めようと声を搾り出す。

「…っ！あいつは…アンタなんかでも信頼してたんだ」

だが目の前の男は眉を寄せ、不快感を表す事すらしない。それどころか逆に、可笑しそうに笑った。

「ククッ…そういう馬鹿な所は父親にそっくりだ」

「…っっ！てめえ、心底腐ってるな」

父はため息をつき、自分を睨みつける晋助を一瞥すると、呆れたように一言残して部屋から出ていった。

「いい加減賢くなれ。綺麗に生きてても野垂れ死ぬだけだぞ」

・・・・・

茜色の空はすっかり漆黒に染まり、辺りには静寂が立ち込めていた。あれから脱出を試みた晋助がやっと外の空気に触れたのは、深夜三時過ぎの事だ。

今晋助がいるのは人気のない奉行所の廊下。

見張りはいたが、寝ぼけ眼の侍ふたりくらいすり抜けるのは晋助にとってはやさしいことだった。

何か手がかりを、そう思って忍び込んだのだが、奉行所内には資料どころか捜査の跡すらない。

ふと、近くにあったひとつの机上のメモ書きに目がいく。

『所長 高杉さん 捜査打ち切り』

メモにはそんな風に、単語だけが走り書きしてあった。

おそらく、伝令を受けた者が所長に伝えるために急いで記したのだろう。

だが、晋助には分かった。奉行所とも繋がりのある父^{あいつ}が、彼らに命じて今回の件の捜査をやめさせた。つまり、父は優心^{あいつ}を見捨てたのだ。

いちいち憤るのにはもう疲れた。父の行動はいつも“期待通り”なのだから。

そうと分かればもうここには用などない。

優心をさらっていった男たちはかなり目立つ風貌をしていた。きっと自力でも見つけさせる。

晋助はそのまま、奉行所をあとにした。

・ ・ ・ ・ ・

空も白みだした頃、晋助はある村はずれのボロボロの空き家にたどり着いた。

「あった…」

やはり目立つ男たちだ。
夜を好みそこらにたむろする柄の悪い浪人たちに金を握らせると、行き先はすぐに見つかった。

ガラガラと小屋の扉を開ける。

目の前には一気に、まだ白んだばかりの空では照らしきれない漆黒が広がる。

しばらくして目が慣れてくると、部屋の奥でのそりと動く黒い塊を確認できた。

恐る恐る塊に声をかける。

「優心…？」

「晋助…さ、ま…？」

優心だ。

晋助は、足元さえおぼつかない暗闇を気にもとめずに塊に駆け寄る。

「平気か！？ 奴らは？」

「僕が偽物だと分かった、またどこかへ行つて、しまいました」

優心に近付くと、彼が縄で縛られているのが分かった。だが、それにしても優心の声は少しおかしい。

「怪我でもしてるのか？」

晋助が尋ねると優心は、ちょっとだけ、と少し苦しそうに笑った。

「今縄を解いてやる」

「いえ、いいです。このまま捨て置いて、下さい」

わざわざこんなところまで捜しに来たんだ。そんなことできる訳ない。

晋助は優心の言葉なんて無視して縄を解く。

傷が痛むのだろうか。時折呻き声をあげる優心を気遣いつつ、晋助は小屋の外へ急いだ。

薄暗い小屋を出ると、突如視界に飛び込んできた光に思わず目を細める。

はっ、として晋助は肩に担いだ優心を見遣った。

「お、前……!!」

目に映ったのは“ちょっと”どころではない。

体中に痣をつくり血だらけで呻く、優心の姿だった。

期待通り（後書き）

あとちょっとで終わります。

この作品には関係ないですが、いま別に真選組メインのお話を構想中です。

お楽しみ（？）に。

お人よし

「待ってろ！すぐ、医者に…っ！」

「いえ、もう…」

血に、泥にまみれた優心は、素人目に見ても“手遅れ”だった。

もう痛みを感じない域まで達しているのか、優心は穏やかに晋助を制止した。

「ちっ…」

子どもの自分でもすぐ見つけられたんだから、奉行所の連中にすればこいつを見つけることなんて簡単だったはずだ。

父^{あいつ}が捜査を打ち切らせなければ…。

いや、あの時自分がすぐに男たちを追って、助けに来ていれば…。

「……………悪イ」

晋助が傷付いた優心を直視することができずに俯くと、優心はそつと目を閉じて言った。

「使用人は…主を護るものです」

後悔はしていない、そう笑う優心に、いたたまれず晋助が眉を寄せ
る。

「俺なんかの…あんな奴なんかのために死ぬな。あいつは…」

「…知ってます。旦那様が僕をどういふつもりで引き取ったかなん
て」

「だったら…っ！」

「それでも…行き場をなくした僕に生きる場所を…意味を作ってく
れた…。それだけで、いいです」

こいつは全く本当に…。

あまりに穏やかに言う優心に、晋助は呆れたように言った。

「人が良すぎるだろ」

優心も、苦笑する。

「そうですね。自分で自分に呆れます。よりもよって自分の両親
を…居場所を奪った張本人に仕えるなんて」

「えっ…?」

「あれ…知らなかったんですか」

衝撃の事実、思わず素っ頓狂な声をあげてしまった晋助に対し、優心は少し驚いたように、でもやはり穏やかに言った。

「だったら、なんで…」

いつもはすました顔をしている晋助の困惑した表情に新鮮さのようなものを感じつつ、優心は思い起こすように、考えながら自らの心境を語りだした。

「両親を失った僕は…これからどうやって生きるかも、どこへ進めばいいのかも分からなくて…。ただ自分をそんな状態にした男を憎みました。だから旦那様に引き取られた時はすぐに分かりましたよ。この男だ、って」

「そんな奴を…なんで優しいなんて言える? 憎んでねえのか」

「憎んでますよ。今も。でもそれが、僕の糧だった」

晋助が当然の疑問を投げ掛けると、優心もまた、当然のようにそれを肯定する。

それから晋助はためらいつつももうひとつ、尋ねた。

「俺のことも：憎いか？」

「：昔父に聞いたことがあります。自分の兄をどう思うのか」

当然この問いにもすぐに答えが返ってくると思っていた晋助は、この“答え”に納得のいかない表情を浮かべるが、優心はそんなことお構い無しだ。

「子ども相手だったから憎いとは言いませんでしたが：好きじゃない、とそう困ったように笑いました。でも旦那様が助けを求めに来ると、結局手を貸してしまうそうです。子どもながらに馬鹿だなあと思いました」

優心は昔を思い出しながら、懐かしそうに目を細める。そして同時に自嘲ぎみに笑うのだ。

「：でもまあ、結局僕もその馬鹿だったって事ですな」

「本当に馬鹿だ。お前：」

お人よし、とはまさにこういう奴のことをいうのだろう。嫌いでも、憎くても、目の前で危機に陥っている人がいたら放ってはおけない。こいつもそんな性分なんだ。

自分なんて、助ける価値などないのに。

父を、己を、なにを責めていいのか分からない様子で晋助は悔しそうに唇を噛む。

だけど優心は笑った。やっぱりとても穏やかに。

「…でも、この数日であなただけのことは嫌いじゃなくなりました。だから…」

——後悔はしてません。

優心はもう一度、そう言うどゆっくりとその蒼い瞳を自らの瞼で隠した。

空を仰いだ晋助の瞳には、抜けるような青空が映った。

お人よし（後書き）

なんか私の書くオリキャラはみんな死んじやうような…（^^；笑

次回はあの人が登場します。

闇に射す光

見通しのいい丘…。

そこに、ひとりの少年が立ち尽くす。

ほとんどの子どもたちが夕飯のために帰っていくこの時分。

こんな辺鄙な^{へんび}ところに、身なりはいいが、泥だらけの少年がただ佇んでいる光景はなんだか不審だ。

少し悩んだ末、散歩の途中だった松陽は少年に声をかけることにした。

「何をしてるんですか？」

少年はこちらをちらりと見た後すぐに、ふいと元見ていた方へ顔を戻してしまった。

少年の視線の先には、こんもりと盛られた土と、そこから抜いてきたのであろう、乱暴に置かれた花が見えた。

「…墓、ですか」

晋助は、勝手に傍にしゃがみ込み手を合わせる男を睨み、不快感を示す。

「…何なんだよてめえ」

男は、挨拶が遅れましたね、と一礼して柔らかく笑った。

「近くで私塾をやっている、吉田松陽といいます。よろしく」

物腰柔らかかでひどく丁寧な男だったが、周りの大人たちが自分にするような媚びた雰囲気は感じられない。

きっとこの男のもともとの性^{さが}なのだろう。

でも、男の人間性がいくら不快感を感じないものであろうと、今はひとりでいたかった。晋助は男から目を逸らし、今度は語気を強めて言った。

「何でもいいからあっち行けよ」

この男、煩わしがられているのは分かっているようだが、でもねえ…と呟きそこから動こうとしない。

晋助が再び睨むと、松陽は苦笑して言った。

「この辺りは日が沈むと危ないんですよ。早く帰りなさい」

「関係ねえだろ」

もう放っておいてほしかった。だが、いつまでたっても松陽は晋助の傍から離れず、それどころか着物が汚れるのも気にせずに隣に腰を落ち着けてしまった。

「何なんだよ…」

目が合うとにこりと笑う松陽に、晋助は苛立ち気味に呟く。

「こんなところに子どもはおいてけません。気が済むまでここにいなさい。ついててあげましょう」

余計なお世話だ。

晋助は、何を言っても聞かない松陽に向けてわざとらしくため息をついてまた呟いた。

「俺に…護る価値なんてない」

まだ年端もいかない子どもが自分をそんな風に言うなんて。

松陽は少年の言葉に、いや、少年にこんなことを言わせてしまう世界に苦笑する。

「君はまだ…己の価値を決めるには若すぎますよ」

・・・・・

どのくらい時が経っただろう。日はすっかり沈み、星々が顔を出す。今だに晋助は立ち尽くす。今だに、松陽はその傍を離れない。

意地を張るのはやめてそろそろ帰ろうか、晋助がそう思い始めたとき、背後の茂みが、がさり、と動いた。

「よオガキ、いい身なりだな」

現れたのは、柄の悪そうな野武士の一団。
そのなかのひとりが晋助に気付いた。

「あ、アイツ、高杉んとこのガキだぜ！」

「そりゃいい金づるだ。さらっちまおう！」

「横の男は？」

「邪魔だ！やっちまえ！」

野武士の集団が一斉に松陽に飛び掛かる。

一対十数人。

きつと、松陽ことうは負ける。

また、自分を護ろうとしたお人よしおんりよしが死んでいく。

晋助は思わず目を閉じた。

ガキイン！

ドカドカ

ガンッ

ドサ、ドサ、

音が、止む。

そっと目を開けた晋助の傍にいたのは、さっきまで傍に座っていた
のと同じ男。

「ほら見なさい。危ない人たちが出てきたでしょう」

そこらに転がり、呻き、逃げる野武士たちと、初めに自分に向けた顔と全く違わない笑顔でこちらに語りかける松陽を代わる代わる見遣る。

内心は驚きながらも、晋助は俯いて皮肉を零した。

「俺の価値ってこういうことだろ」

松陽は、ふっ、と困ったように笑い、乱れた着物を直しながら諭すように話し出した。

「金持ちの息子、ですか？ 本当の価値っていうのはそんな肩書きじゃないですよ。そんな何もしなくてもついて来るものは本当の価値とは言えません」

「…？」

「それが善いものであれ悪いものであれ価値を創るには行動が必要です。君はまだ何もしてないんじゃないですか？」

晋助は、はっとする。

確かに、自分は何もしていない。周りの“した”ことに勝手に腹を立てて、憤っていただけだ。

「大人と、世界と一緒に腐って何になりますか？ 貴方はまだ若いん

です。今日を悔いるよりもただちに決意して行動すべきです。価値が決まるのはそれからですよ」

松陽はそう言うと、にっこり笑って晋助の頭を撫でる。

いつもなら払いのけるところだったが、男の手はなんとなく心地好かった。

「晋助様〜！」

遠くから、ちらちら光る提灯の光と声が近付いてきた。

「あ、お迎えかな？」

松陽は晋助の頭から手を除け、ぽんと背中を押した。

「…アンタ、剣も教えてるのか？」

去り際、晋助が呟く。

「うゝん…多少はね」

流派もなにもないから、護身の範囲ですけど、松陽はそう言うてにこにこ笑った。

たったひとりで十数人の野武士を振り伏せることが“護身”なのだろうか。

「…アンタの塾ってどこにあるんだ？」

「ここから少し南へ行った村です。ほら、あの村」

松陽は、ぽつぽつと明かりの灯る塊を指差す。

晋助の家からさほど遠くもなさそうだ。

わざと興味なさげに、ふうん、と呟く意地っ張りな晋助に、松陽はこっそりと微笑んだ。

「いつでも遊びに来るといい」

「…別に行かねえし」

晋助はそう言うのと迎えにきた従者を通り過ぎ、さっさと家路につく。

いつの間にか空には大きな満月が浮かんで、行く先を照らす。

暗闇だった道に、ほんのり、柔らかな光が射した。

闇に射す光（後書き）

次回最終話です。

牙

がたり、と船が揺れて、晋助は目を醒ました。

ふわふわと浮遊する船。窓の外には飛び交う鉄の塊たち。

すっかり慣れたこの光景が、さっきまでの夢のせいでなんだか不自然に映る。

——懐かしい夢を見た。

晋助は窓べりに置いていた吸いかけのキセルを手を取った。

あれからいろいろあったつけ。

あの後結局、松陽先生の私塾に通った。

そこで一緒に学ぶ奴らに出会って、喧嘩して、馬鹿をし合って…。

あんなに嫌っていた父は病で呆気なく死んだな。

それから、先生を失って…。

戦に出て、また次々失って。

あの時から変わらない。世界は腐ったままだ。いや、あの時より腐ったか。

今だに自分の価値なんて分からない。

進む道が合っているのかなんて知らない。

綺麗に生きてても野垂れ死ぬだけ、今になって父の言葉が分かってしま^{あいつ}う自分に嫌悪感を覚える。

だけど、憎しみを糧に綺麗に生きる…。残念ながらそんなことはできそうもない。

憎しみを持たず、ただ信じる…。それも無理だ。

結局俺は目の前の道を進むことしかできねえんだ。

あの時先生が照らしてくれた道を…。

ある時から再び光を失った道を。

進み続ける。

たとえその先が何もない暗闇でも。

止まらない。

不様に生え残った、真っ赤な牙が折れるまで。

牙（後書き）

終わりましたっ。

何か何とも言えない最終回ですが…。

読んで下さった方、ありがとうございました♪

次は予告してた真選組メインの話するのでお楽しみに〜。

では、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9917w/>

深紅の牙

2011年10月10日08時20分発行